



同・松村謙三賞受賞作品《お碗雨》の前で、左から洋画家・山本貞、プリヴェ企業再生グループ社長・松村謙三、作家の原田圭の各氏



第47回昭和会展昭和会展受賞作品《それぞれの刻》の前で、左から作家の奥谷太一、日動画廊社長・長谷川徳七、評論家・南畠宏の各氏

104ページで触れたように、第47回昭和会展では第1回展の昭和会展受賞者である奥谷博氏の長男・奥谷太一氏が同賞を受賞。父子受賞は同展では初の出来事、これは同時にその歴史の長さも端的に物語る。

才能豊かな若手をいち早く見だし、第一線で活躍する作家へと育てあげてきた、約半世紀にわたる積み重ね。それゆえにますます存在感を増し続ける。「巨匠への第一歩」という展覧会のキャッチコピーにふさわしい内容を誇る同展、その最新世代の魅力に、受賞者と審査員たちとの対話を通してより深く迫っていく。

【昭和会賞】—— 奥谷太一
 【松村謙三賞】—— 原田圭
 【ホスト】
 松村謙三（プリヴェ企業再生グループ代表取締役社長・大阪大学 知的財産センター 招聘教授）
 山本貞（洋画家・日本芸術院会員）
 南畠宏（美術評論家・女子美術大学教授）
 長谷川徳七（日動画廊代表・昭和会事務局長）

第47回昭和会展受賞者を囲む——①

歴史をつくる、
 一瞬の出会い、——昭和会展・最新世代の
 魅力にせまる

人同士の距離は近いのに、心は遠い。
その表現には、この背景だと思いました。

嘘の通用しない、
ぶつかり合いが紡いだ歴史

—今回は、昭和会展の昭和会賞、松村謙三賞の各受賞者、そして審査員の方々による座談会を設けさせていただきました。まずは、昭和会賞の奥谷太一さん、このたびは受賞おめでとうございます。

奥谷 ありがとうございます。

—この賞の第1回受賞者が太一さんのお父様の奥谷博先生、47年の時を経てこうした結果になるのは、主催者側としても感慨深いものがあるのではないのでしょうか？

長谷川 私が第1回展をたちあげてから約半世紀、父子に同じ賞を授賞するというのは、なんと深い因縁か、と非常に思いますね。

当時を思うと、梅原龍三郎をはじめ、林武、海老原喜之助、東郷青児、小山敬三など、画廊で扱う作家の方々はみんな父（日動画廊創業者・

長谷川仁氏）と同年か、それ以上の世代。若くても50歳くらいで、あと10年、20年後、私が画商としてどうやっていくかを考えた時、絶対に若い才能が必要だ、と痛切に感じていた。それで評論家の先生、画家の先生、新聞社の美術記者さん、そういう方々に審査員になっていただき、新鋭を対象にしたコンクールを行なおうと考えたわけです。

当時は、20代、30代の作家なんて新人扱いすらされなかったから、そんな若い作家たちのためのコンクール自体がたいへん異例で。しかも賞金30万円という額も、私が画商になる前に勤めた住友銀行の給料が1万8千円くらいでしたから、なかなか値打ちある金額だったんです。これはかなりの英断でした。

でも、第一回受賞作家の奥谷博さん、木村賢太郎さんに続き、福本章さん、浮田克躬さん、鴨居玲さん……かなりのツワモノたちを次々に見出したことで認知度も上がり、そこへ昭和47

も美術館とも根本的に異なる強さ、これだと思っ
うんです。

作家、画商、そしてコレクター。つまり嘘が通用しないつながりで出来上がっている厳しさがあるんですね。そのぶつかり合いが歴史をつくりあげてきた。そう思うんです。

—美術を愛する、ということでは松村社長のようなコレクターの方々の非常にリアルなかたちのご支援もあって、昨今ますます昭和会展への注目も高まっていると感じます。

松村 審査員として関わるようになったのは2007年から割と最近ですが、毎回、実に面白い。ますます興味が深くなりますね。

—2008年からは「松村謙三賞」も設立されて、賞を出される立場にもなられた。

松村 林武賞がなくなり、長谷川社長からぜひ後継に「松村謙三賞」を出して欲しい、と依頼がありました。一度は固辞しました。でも他の先生方からもお願いされましたので、結局お引き受けすることにしました。若い作家の励みになれば、と思って続けています。

誤解されやすいので説明しておきますが、「松村謙三賞」と言っても、私個人で決めていくわけではありませぬ。日本芸術院会員の先生方や南寫先生のような評論家の先生方、約20人の美術界の第一人者によって審査される公平な賞です。多数決で、票が多いものを残しながらそれを何

〜8年頃には絵画ブームが到来して軌道に乗って。その後も優れた才能を輩出し続けたことでステイタスを確立することができ、今日に至っているわけです。

南寫 僕は審査をさせていただいて、改めてこの昭和会展の意義深さを実感するのは、美術を根源的に愛する人たちが集う画廊、その厳しい現場の人たちがつくりあげてきた、美術批評と

度が行かない、「昭和会賞」、それに並ぶ「松村謙三賞」、そのほかすべての賞が決まります。

「松村謙三賞」のことは後でまた触れるとして、まずは今回の「昭和会賞」の奥谷太一さんですけど、都合3度行なわれた投票で常に過半数を獲りました。過去6回審査に関わってきましたが、毎回過半数だった作品は初めてです。

長谷川 なかなかないことですね。ただ、私は太一さんの才能は早くから認めておりましたので、以前から一度出品してほしいと頼んでいました。ずいぶん力を溜めて、やっと出してくれた、という感じで、それだけにこの授賞は然るべきものかな、と。

一瞬で引き込まれる、
虚無的な「背景」

松村 奥谷太一さんの作品には、見た瞬間に深いものを感じました。私は、絵を買う時は一瞬の判断で決めます。それは票を入れる時も同じで、見た瞬間が勝負です。

南寫 おっしゃる通り。作品との一瞬の出会いを通して、この作品は信じられる！と直感的に確信できるかどうか。それは、それをつくる作家その人を信じられるかどうか、ということにつながるのですが、その自己確認の場が審査なんだと思います。

その結果としての賞である。そのことを励みにしてほしい、ということはずごく思います。



奥谷太一（右）電舌蘭と私 2005年 185×227cm（左）

帰路 2007年 162×194cm いずれも油彩、キャンバス

《電舌蘭〜》は東京藝大の卒業制作。この頃から方向性についての模索が続いていたが、修了制作である《帰路》にて現在のかたちへと発展していった



おくに・たいち
1980年神奈川県生まれ。2004年国際富士美術賞25周年記念グランプリ瀧久雄賞。05年東京藝術大学卒業、07年同大学院修了。09年第77回独立展独立賞。10年第78回独立展にて会員推挙、第8回前田寛治大賞展出品。今秋より、文化庁新進芸術家海外研修員としてフランスへ。



まつむら・けんぞう
プリヴェ企業再生グループ株式会社代表取締役社長。他に大阪大学 法科大学院招聘教授、大阪大学 知的財産センター招聘教授、経済同友会金融市場委員会委員も。1958年生まれ



か？

奥谷 受賞の責任が、それだけ重大なんだな、っていうのが改めて実感されます。

受賞した時は興奮状態に近いんで、嬉しくてフワフワしているんだけど、一方であまり実感がなくて……。でも時間がたつにつれて、歴史に残る作家の方々に連なる責任感が増してきました。そんなところ実際に審査いただいた方々の実感をうかがうと、ますます重くのしかかってきます。

南畠 この賞はね、後から効いてきますよ（笑）。

——さきほど、長谷川社長から「なかなか出してくれなかった」という話もありましたが、そうだったんですか？

奥谷 自分の中で、どういう作品をつくっていいのかな、とずっと迷っていたんです。父にも「あまり欲を出して『いかに』なものをつくるより、もっと地道なことをやれ」と言われてきて。ここ5〜6年で画風や方向性もだいぶ

一瞬で深いものを感じました。

特に「背景」が効いている。——松村謙三

定まって、独立展の出品などで先輩方にも揉まれてきましたので、タイミング的に自分の中でスッと落ち着いたというか。

松村 審査会場に入った時に真っ先に、パッと目に入ったんだ、あの作品が。特に、背景。この絵は背景が効いている。そう思って近づいたら、奥谷太一と書いてある。それで奥谷先生のご子息の、太一さん！と驚いたんだけど。

それはさておき、その後の会食の席でも南畠先生との背景が話題になったんです。

南畠 松村さんとお話しをしていてそうおっしゃられたので、はっとしたんです。僕も密かに太一さんの作品は「背景」だと思っていたんです。あの背景だから、賞を獲れた。

前景の人物とその物語性は、むしろこの何も描かれていない背景への導入として機能していて、その向こうに広がる、見えているように見えていない、見たいんだけど見えない世界に、私たちを導き入れようとする。そうした極めて今日的な、時代精神のニュアンスの表れとして、僕は感じたんですが。ご本人はどういう思いで、この背景を？

奥谷 うーん……具体的にモノをいれるって

うのがピンとこなくて。

街にいろんな人たちが集まって、偶然出会い、それぞれの人生が行き交う、その空間感というか……。特にカメラであつたり携帯電話であつたり、メディアがいろいろ発達する中で、かえって不可解で混沌とする人間関係の、新しい繋がりと。人同士の物理的な距離は近くても、心は離れている、そういう思いの中で、どんな背景がふさわしいのか、と。それがこういう形で出てきているんですけれど。

南畠 なんともいえない、「虚無的」な雰囲気、緊張させられます。そのための背景として非常に成功している。

「虚無的」というのはネガティブな意味ではなくて、すべてを明快に表そうするだけではない、もうひとつの世界への距離のとり方ともいえるんじゃないでしょうか。そうした思いを受け止めてくれるフィールドになっているような気がする



みなみしま・ひろし
美術評論家。第53回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッション等を歴任。現在、女子美術大学教授、美術評論家連盟常任委員。1957年長野県生まれ

「虚無的」な絵画空間に、

極めて今日的な時代精神を感じます。——南畠宏

んです。

松村 画面は何かを語りかけてくるんだけど、それがなにか探ろうとしても、当たらない、掴めない。そんな不思議な感触が、南畠先生の言う「虚無」なのかな、と私は思いました。いずれにしても、あなたの絵は、深い。私は、お父さんの傑作を数多く買わせてもらっているわけだけど、描いているものや感性は違うが、深さの点ではさすがに親子、才能が継承されているんだと感じました。

ところで、いつか聞いてみたいと思っていたんだけど。お父さんと同じ油絵の世界に挑んでいる、その気持ちを知りたいんだ。葛藤とかはなかったのかな？

奥谷 あまりそういうことはなくて。自然にさ



奥谷博 ベランダの花 1966年 90.9×116.7cm 油彩、キャンバス
冒頭で話題にでた第1回昭和会賞受賞作品。文中に登場した作家以外にも森本草介（第5回優秀賞）、佐藤泰生（第12回昭和会賞）、石垣定哉（第21回昭和会賞）、山村博男（第28回昭和会賞）、開光市（第33回優秀賞）、西房浩二（第35回日動火災賞）、齋正機（第38回昭和会賞）、小木曾誠（第41回昭和会賞）など、ベテランから若手まで活躍著しい作家は枚挙にいとまがない

はせがわ・とくしち
日動画廊代表取締役社長。1939年東京都生まれ。64年から住友銀行東京支店勤務を経て日動画廊入社。98年コマンドール芸術文化勲章をフランス政府より受賞



第1回展から約半世紀、
父子で同じ賞とは
なんと深い因縁かと。

——長谷川徳七

レッシャーはなかったらどううね。

奥谷 そうですね。全然そういうことはないです。

長谷川 ただ、どうしても偉大な父親の二代目というの、難しいですよ。成功者の栄光のもので見られちゃうから、世間の目も厳しい。だから太一さんは、よっぽど危機感をもたねばいけない部分もあって、そこは大変だと思えます。そこからどう抜け出すか、これが難しいところですよ。

松村 だけど太一さんのこれだけ素晴らしいセンス、才能、それにお父さんとの関係、もろもろ考えた時、太一さんはこれまでの例を覆す存在になる、そう私は思いますね。

長谷川 9月にはパリへの留学も控えているし、改めてここからどう自分を磨いていけるか。これからを楽しみにしております。

奥谷 ありがとうございます。頑張ります！

松村 たしかに、お父さんは少しも驕らない人ですね。だから、「太一よ、お父さんを見習え！」みたいな

植物を描いていると、 深いところで繋がっている感じがして。

際立っていた、もうひとつの個性

——では次に、「松村謙三賞」の原田圭さんについてお話をうかがおうと思います。

松村 さっき、「昭和会賞」の奥谷さんは、常に過半数だったという話をしましたが、実は原田さんも毎回開票のたびに僅差で二番手だったんですよ。それくらい、絵画ではこの二人の作品が際立っていた。

——作品の世界観が二人、非常に対照的ですね。彼女に関しては、山本貞先生にぜひその魅力がうかがいたいのですが。

山本 そうですね。奥谷太一さんの作品が都市型な一方で、原田さんの作品は田園型といえますか。現代社会の人のありようから発想されたものであるのに対し、自然との普遍的な関わりから発想されたもの、という感じがありますね。今回はとても際立ったふたつの個性が顕彰された、という印象を持っています。

——彼女の絵はいつからご覧に？

山本 2〜3年前、東北芸術工科大学に特別講師と呼ばれた時に、教授の木原（正徳）さんに「変わった絵を描く生徒がいる」と彼女の

作品を見せられたんです。「よくその辺に座り込んで、野辺の花や雑草とかをスケッチしてるんですよ」と聞いて、なるほど個性ある絵だなと思った、それが最初でしたね。

——たしかに非常に独特の視点があります。

山本 そうなんです。今回、昭和会展に出品すると聞いて、そういう彼女の持ち味が全面に出た作品だといいなあ、と思っていたら、これまでもかなり良いものが出品されていて、私も嬉しかったです。

松村 君の絵は面白いよねえ……。改めて、どういう絵なのか教えてくれないかな？ この傘みたいなのは何？

原田 畑のスプリングカラーで……。

松村 スプリングカラー！ ほお……。

原田 だから……本当は下から出てるはずなんですけど（微笑）。

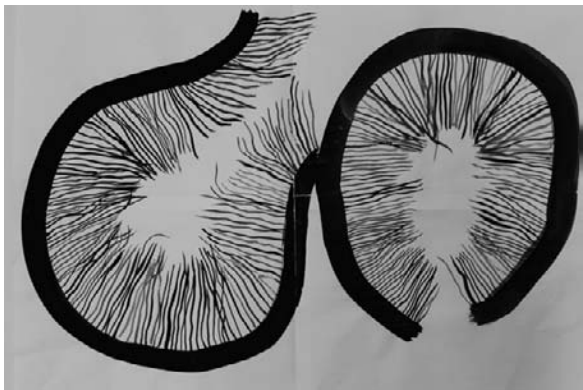
松村 この目隠ししているのは？

原田 不織布っていう、クリーニングから戻ってくる時についてくる白い布に似たものです。光を通す布なので、冬場の畑に霜よけのためにかけられているのを見た時、思いついて……。

山本 面白いなあ。4人の女の子は、布をかぶ

いえるかもしれませんね。

原田 うーん……モチーフはあくまで入口というか……植物でも人でも、もつと深いところに入っていくための足がかりというか、そういう風に思っている感じはします。植物を描いていると、フッと開く瞬間があつて……人間だけ



作家によるドローイング。「紙をロールで用意してあるので、バアッと100号大（!）くらいで描けたりして面白いです。こういうイメージをタブローに融合したい……（作家談）」

じやない、世界の繋がりを感ずることができて。
山本 面白いでしょう、彼女は？ フキが歩いたりする絵があるんですよ（笑）。
松村（笑） なんてしようね、それは？
原田 ポートフォリオ持ってきます。山本先生にも観てもらいたいドローイングが。

深いところを描くため、挑戦していきたい

山本（ドローイングの写真をしながら）このウニヨウニヨしてるかたちは？

原田 これは、湿気とか空気の流れとか、感じとったままドローイングしてみたもので……あとは、植物をスケッチした後で、面白かった部分だけ選んで描き直してみたり……。

山本 こういう独特な発想が、この人の頭の中に溢れんばかりにあるわけです。彼女の山形のご実家はさくらんぼなどもたくさん育てていて、まわりも自然がいっぱいなんだそうです。そういう環境がこういう植物と対話をするかのような感性を育んだんでしょうね。

松村 いやあ……彼女の作品って不思議な楽しさがあるなあ、と思っていたんだけど。つまりいっぱいいろいろなもの繋がっている、っていう実感からきているんだね。

——巫女的ともいえるような感覚ですね。

植物と対話するかのような感性は、

自然の中で育ったからでしょうね——山本貞



はらだ・けい
1987年山形県生まれ。2010年東北芸術工科大学卒業、二紀展入選。11年二紀展奨励賞。12年同大学大学院修了。4月より東京藝術大学大学院に進学。

せられた畑の植物の化身、ということ。
原田 ええと、植物を擬人化しているということではないんですけど……。

松村 私には、最初観たとき、彼女自身の4つの性格を描いたものに思えたんです。新しいタイプの自画像なのかな、と思って。

——なるほど、それも面白い解釈ですね。

原田 ええと、自画像というか、どこかしら人と植物を同じように見ているというか……。人間と植物は別々の存在だけど、繋がるところがあるというか……深いところに入っていけばいいけど、同じものになるんじゃないかな、っていうのが。

——めぐりめぐって、自分自身を見ている、と

山本 こういうドローイングは最近始めたの？

原田 2年くらい前からです。湧いてくるイメージを整理したい、っていうのと、普段の制作は卵黄テンペラなんですけど、そのための、例えば細密に描かなきゃいけない、とかそういう制約を外して思いっきり描いたらどうなるのかな、っていうのもあつて。

山本 春から東京藝大の、技法材料の佐藤一郎さんの研究室に入ったんですかね？

原田 はい。いまは、ロウ絵の具とかにも挑戦していて……だけど、やっぱり卵黄テンペラが気持ちいいというか、自分で色を作っている感じが。でも、もつとイメージがうまく伝えるのは何がいいかな、って……。こういうドローイングも、テンペラの細かく描く制作と融合していったらいいんですけど……。

長谷川 私はね、今回の受賞作品はあなたの制作でも代表作のひとつになるくらい良い作品だと思ってるんです。悩みすぎず、焦らずに、このかたちを足がかりのびのびと描いてほしいと思うんですけど……。

松村 あなたはたいへん独創的な個性を持っている。これからどんな作品をうみだしていくのか、非常に私は期待しています。

原田 はい。どうか、これからもよろしくお願

やまもと・てい
洋画家。現在、日本芸術院会員、二紀会理事長、日本美術家連盟常任理事。1934年東京都生まれ。58年武蔵野美術学校卒業。72年の第8回昭和会展での優秀賞作家でもある

